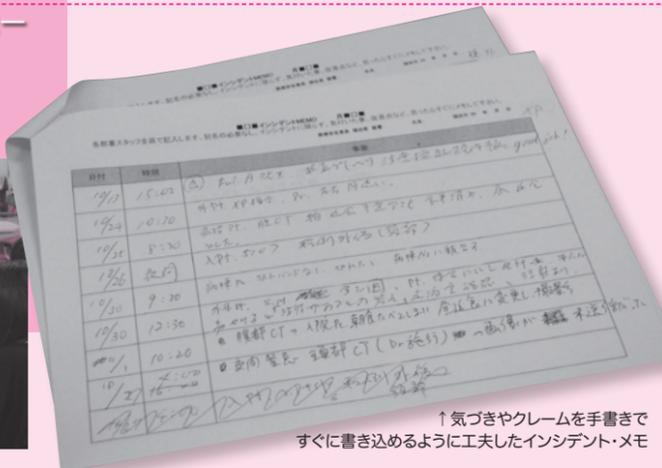


↑会議では活発に意見が出ている



↑気づきやクレームを手書きで速く書き込めるように工夫したインシデント・メモ

「今後は他部署に対する意見も積極的に出るような仕組みづくりをしたいと思っています」と話す村井靖放射線技師長



今月の診療所 ▼
医療法人早仁会
久喜メディカルクリニック
埼玉県久喜市下早見1183-1
外科、内科、整形外科、リハビリテーション科
http://www.kuki-med.jp/



先進診療所の

会議術

医療安全管理委員会の会議は月に1回開催。普段からコミュニケーション促進に努めているため、会議も和気あいあいとした雰囲気だ

貴院では、会議をどのように位置づけているのだろうか？ 単なる“業務連絡”の場と捉えるだけではもったいない。会議をうまく活用できれば、診療所はもっと活性化するからだ。今回は、医療事故防止に向けて会議を活用している診療所を紹介する。

インシデントの報告方法を見直し 医療安全管理の会議の効果アップ

2 006年に開業した久喜メディカルクリニック(19床)。外科、内科、整形外科、リハビリテーション科を標榜し、院内には医療安全管理委員会、院内感染対策委員会、褥瘡対策委員会、福利厚生委員会、広報委員会を設けている。

報告件数の増加を図り インシデント情報を共有

委員会のなかでも、とりわけ活発に活動しているのが医療安全管理委員会だ。各部署から選出されたスタッフ10人から成り、毎月第2金曜日の夜に会議を行っている。当初は、スタッフが提出したインシデント・レポートをもとに対策を講じていた。だが、本日に医療事故を防ぐにはインシデント・レポートとして提出されないような小さな気づきを拾い出し、その対策を立てる必要があると、医療

安全推進者の村井放射線技師長は考えた。

そこで、A4判の用紙にマス目を印刷したものを各部署の壁に貼るようにした。小さな出来事はその場で記録しなければ忘れてしまうため、気づきが生まれたら、スタッフがそこに日付と気づきやクレームなどを手書きで1〜2行書き込む。メモはその部署の所属長が確認し、部署内で情報共有する。村井放射線技師長はこれを「インシデント・メモ」と名付けた。

毎週月曜日に各部署のインシデント・メモのコピーを取り、回収して動向を見る。重要案件は朝礼時に発表して情報共有を図る。その場で対策を決めて、院内掲示を行うこともある。月1回の会議の前にその月分をパソコンで入力。そのプリントを会議の日の朝までに配布することにした。各委員は所属長と案件について検討し対策を書き込み、会議に臨む。会議で

会議成功のポイント

- ・ 普段からスタッフ間のコミュニケーションを促進し、意見が出やすい雰囲気づくりに注力
- ・ 医療安全管理委員会の会議の議題となるインシデント報告件数を増やす
- ・ 改善案は全体会議で提案することでスタッフのやりがいにつなげる



↑会議で出た意見はホワイトボードに書き、併せて改善案の優先順位も決める



←会議では、危険予知トレーニングに使用する写真やインシデント・メモを参加者に配布し、これをもとに議論する

は、各部署1件ずつ重要事項を発表し全員で質問・意見を出し検討する。それをまとめて、全スタッフが参加する月1回の全体会議で配布し、情報共有する。

1週間あたり30件ほどの気づきやクレームがあがってくるが、なかには検討するほどでもないものもある。だが、インシデント・メモにはどんな情報を書いてもかまわない、と全スタッフに告げている。「書く内容についてルールを決めると、スタッフが毎回書くべきかどうかを考えなければなりません。そうした手間があると、情報があがってこなくなります。とりあえず書いてもらい、検討が必要かどうかは所属長や委員会が判断することにした」と、村井放射線技師長は説明する。結果、より多くの情報が寄せられるようになった。会議での検討事項も増加した。

また、重大な報告の場合は、インシデント・レポートを提出してもらう。できるだけ早く情報共有するため、毎朝の朝礼でスタッフにその内容を伝えるようにしている。「患者さんのため、医療スタッフのため、情報収集↓解析↓共有↓対策を、シンプルかつスピーディ

に行う」というのが、同院の医療安全管理委員会の方針だ。

危険予知トレーニングで 事故を未然に防ぐ

同会議では、ヒューマンエラーや事故の防止に向けて危険予知トレーニングも行う。各部署持ち回りで、スタッフをモデルに業務風景を写真にする。それを題材に、そこに潜む危険をみんなで挙げていく。また、その部署内では当たり前と思っていたことも、他部署から見ると改善の余地がある事がわかる、という効用もある。会議の最後には、予防対策のための行動目標を、「五七五」で考え、委員全員で唱和する。村井放射線技師長は「始めは唱和を恥ずかしがっていましたが、毎回唱和することで段々と慣れてきたようです」と話す。

同院では、普段からスタッフが食事会やスポーツ、旅行など頻繁に行っている。その効用で会議でも意見が活発に出ているという。「今後はほかの人の行動を褒めるような内容も書いてもらえようになりたいと思います」と、村井放射線技師長は抱負を語る。